

「ワット」に於る語り についての一考察

森井正史

『ワット』⁽¹⁾ *Watt* は、ベケットの主要な小説の中では、『マーフィー』について英語で書かれた2番目（『蹴っても無駄だ』を入れると3番目）の小説である。いずれも3人称小説の形をとっているが、『ワット』では、途中で物語の語り方が崩れて、小説の構成が複雑になっている。拙論は、どのようにしてそうなったかを、又、意図してそうなったのかどうかを小説全体の構成を概観しながら考察する。

4つの章（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ）から成るこの小説には、主として2つの物語が見られる。1つは中年男ワットの物語であり、ワットがノット氏の家に行き、そこで召使いの1人として或る期間働いて立ち去るというストーリーである。もう1つは、この物語の語り手（私）とワットの出会い及び対話——これを物語と言うには短か過ぎるかも知れないが……——から成り、ワットが語り手に、ノット氏の家での体験を話す場面が展開される。前者が見られるのは、主としてⅠ，Ⅱ，Ⅳに於てであるが、Ⅲに於ても見られる。この小説の中心となっているのは、このワットの物語であり、語り手は、初めは、物語の外から全知であるかの如くに語っているが、Ⅱの初めの方で、ノット氏の家でのワットの体験

(1) この小説は、Deidre Bair, *Samuel Beckett*, Paris: Fayard, 1979, pp. 297-307によると、1943年から1945年の間に、南仏 Vaucluse 県の Roussillon で書かれた。

を語っている時、語りをコントロールできなくなり、自分は全知なのではなく、ワットの物語は、実はワットから聞いたことを語っているのであるという主旨のコメントを差し挟んでいる。このコメントによって、我々読者は、‘私’即ち語り手が、ワットの単なる代弁者でしかないことを知るのである。その後も、時折、この種のコメントを挿し挟みながらも、語り手は物語の外からワットの体験を語り続けている。Ⅲに入ると、何の前触れも無く、語り手が突然物語の舞台に登場し、ワットがどのような条件の下で自分の体験を語り手に話したか、その対話の場面が展開される。この場面も、やはり語り手（‘私’）が語っており、彼がサム Sam という名前であることを、そことなく——とはいえ、3度も——漏らしている (p. 157)。こうして、‘私’が作者 Samuel Beckett であることが、仄めかされている。Ⅳに入ると、語り手は、再びワットの物語を、Ⅰ、Ⅱと同様、物語の外から、何事も無かったかのように語り始めるのである。

ここで、この小説を各章ごとにまとめると、ほぼ次のようになるであろう。

- Ⅰ. ワットの物語：電車から降りて鉄道の駅に向かい、ノット氏の家に到着するまでのワットの旅（前半）、及び、到着直後、台所で前任の召使いアルサーヌが、新任の召使いとしてやって来たワットにする一種の報告（後半）。
- Ⅱ. ワットの物語：ノット氏の家での滞在の第1の時期（＝1階で働いていた時期）のワットの体験、即ち、音楽室でのゴール親子の情景の意味が崩壊するという体験とポット体験。及び、この家の幾つかの状況を理解しようとして繰り広げられる、執拗なまでに論理的・合理的な推論。この種の推論がⅡの大半を占める。この章の初めの方で、語りに対するコメントが初めて挿入される。
- Ⅲ. 語り手とワットの物語：精神病院らしい施設の庭に於る、語り手（‘私’）とワットの出会いと対話。ワットは、ノット氏の家での滞在の第2の時期（＝2階で働いていた時期）の体験を話している。
- Ⅳ. ワットの物語：ノット氏の家在台所から立ち去る時から、駅へ行き、早

朝、汽車がプラットホームに入って出発した時姿を消すまでのワットの旅。尚、この小説には、末尾に補遺が付けられている。

Iの冒頭で見られる、物語の舞台になっている町の名や、ノット氏の家の位置、ワットと語り手が入れられている精神病院らしい施設の在る場所が示されていないが、Iの冒頭の市民たちの会話の場面から、この町は、ダブリンであることが指摘されている⁽¹⁾。又、ノット氏の家の位置は、この町の郊外らしいことが、小説中で暗示されている(pp. 35-36)。

この小説は、論理的には、ワットがノット氏の家へ旅をし、その家で一連の体験をした後立ち去り、その後、精神病院もしくはそれに類する施設に入れられ、そこで‘私’つまり語り手サムと出会い、ノット氏の家での体験を話した、ということになる。

では、このような順序で物語が展開されずに、実際、この小説に見られるような複雑な構成になったのは、作者が初めから企図したことなのかどうかを、以下に於て考察しよう。

この小説の中でノット氏の家でのワットの体験の物語だけ見てみると、物語はⅢで中断されているにも拘らず、同じ章でワットの滞在の第2の時期の体験が、語り手によって断続的にではあるが(読者に)紹介されているため、I～Ⅳに亘ってワットの物語の大部分——ワットが登場してから、ノット氏の家での体験を終え、最後に駅のプラットホームから姿を消すまで——が、変則的にはあるがカバーされていて、一応完結したものとなっている。

このうちIとⅣは、対称的になっていて、物語の言わば枠組になっている。既に見たように、Iでは、ノット氏の家への旅と到着時の様子が、Ⅳでは、そこを去り再び旅をするワットの姿が描かれている。又、Iに於てもⅣに於ても、

(1) John C. Di Pierro, *Structures in Beckett's Watt*, York, South Carolina: French Literature Publications Company, 1981, p. 20.

ワットは、しばしば市民たちの目を通して描かれている。Ⅰでワットが登場するのは乗物（電車）から降りた時であり、Ⅳで姿を消すのも乗物（汽車）に乗った時であり、いずれの場合も、市民たちが見守る中に於てである。Ⅰでは、ワットがノット氏の家に着した時、最初に入ったのは台所であり、そこで、前任の召使いアルセーヌ——彼はワットが新任としてやって来たため、やがて立ち去ろうとしている——から、一種の報告を聞いている。それに対して、Ⅳでは、ワットは、台所にミックスという新たな召使いが来たため、立ち去る準備をして、最初にやって来た時と同様、台所から立ち去っている。但し、ワットは、立ち去る時、アルセーヌのように陽気に笑う気になれず、アルセーヌが彼にしたような報告もせず、しかも別れも告げずに出て行っているという違いがある。が、全体的に見れば、ⅠとⅣがほぼ対称的になっていて、しかも、いずれの章に於ても重要な出来事は殆ど起っていないと言えるであろう。ワットは、ノット氏の家を出た後、駅に着き、プラットホームから大通りを眺めている時、人間と思われる形をした姿を見かけ、それが何者なのか知りたいという強い好奇心を持つが、《在るがままの物事とは何かを知ろう》(p. 236) とすることは《誤ち》であることを、既にノット氏の家での体験で悟っていて、この好奇心は、一時的なものに終わっている。このことを別にすれば、ワットは旅の途中には、彼を取り囲む外の世界に殆ど関心を示さず、何事が起っても、市民たちと関わろうとしていない。ノット氏の家への途上、駅でポーターとぶつかり、ミルク缶が倒れ、そのポーターから罵られても、又、マッキン夫人に石を投げられ、帽子に命中しても、ワットは黙って旅を続けている。ノット氏の家を去った後、駅の待合室で汽車を待っている時、ドアが突然激しく開けられてぶつかり、気絶し、水をかけられても、怒りもせずに立ち上がってカバンを両手に持ち、切符売り場へ向かっている。ワットが、周りの世界——人間も含めて——に強い関心を示すのは、専らノット氏家に居る間だけであり、この間の体験がワットの物語の核であり、この小説の主要なテーマとなっているのである。

Ⅰの前半では、毒殺犯の刑期や、子供の誕生時の自慢話や苦勞話をするなど

して、俗事に対して強い関心を示しているハケット氏とニクソン夫妻の姿、即ち市民たちの世界が描かれていて、彼らの世界に背を向けているワットは、もっと別のことに関心を持っているであろうことが暗示されている。こうして、内面に深く沈潜しているかのように旅を続けるワットの真の関心事が一体何なのかと、興味をそそっている。Ⅰは、後で考察するアルセーヌの報告も含めて、来るべきワットの物語の核心への導入の役割を果たしている。但し、ⅠとⅣは、物語の単なる枠組であるに停まらず、ベケットの小説一般の1つのテーマであるアイデンティティの欠如が、これらの章に見られるので、この点について若干触れておこう。

Ⅰで見られるように、電車から降りたばかりのワットを、市民たちが薄暗がりの中で見出した姿は、読者を啞然とさせる。テティ（ニクソン夫人）には、それが男か女かも区別がつかない。ハケット氏には、それが包みか絨毯のように見えている。ニクソン氏は、ワットに《7年前》(p. 25)——と作者は皮肉にも時間を明確に示している——お金を少々貸したことがあり、ワットとは多少とも知り合いであるが、ワットが何者なのか知らない。ワットの《国籍、家族、生誕地、信仰、職業、生活方法、特徴》(p. 22)を何も知らないのである。一方、ニクソン氏は、ワットに会ったり、ワットのことを考える度にハケット氏のことを考えてしまい、逆に、ハケット氏に会ったり、ハケット氏のことを考える度にワットのことを考えてしまう、と言っている (p. 19)。ワットのアイデンティティも、ハケット氏のそれも曖昧になっている。Ⅳに於ても、駅でワットを見た乗客のコックス氏とウォーラーにとっても、ワットは得体の知れない人間となっている。つまり、彼は、‘what?’と尋ねられる対象なのである。一方、ワットは、ノット氏の家では、この家の状況がどうなっているのか、又、ノット氏が何者なのか、言わば ‘what?’と疑問を発する立場にある。従って、Watt という彼の名前は、二重の意味で（英語の）疑問詞 what との語呂合わせであろう。ニクソン氏は、彼の妻から、この得体の知れない人物の名前を聞かれた時、こう答えている：《ワットだ。》(p. 18) ついでながら、ノット氏 Mr Knott は not の語呂合わせであり、‘無’ nothing を暗示していると言えよう。

さて、アルセーヌは、その報告の中で、彼がノット氏の家で体験した、周囲の世界の日常的意味の崩壊という出来事が、ワットの身の上にも生じるであろうと、その報告の中で予言している。ワットが、実際ノット氏の家で体験する、音楽室でのゴール親子の情景の意味の崩壊は、この予言に対応するものであり、当然のことではあろうが、作者がこの予言を書いている時点で、既に、ワットの体験について、かなり具体的な構想を持っていたことは確かである。

では、語り手が、將に上述のワットの体験を語っている時にそれを明確に語るができなくなり、自分が全知ではなく、ワットの単なる代弁者でしかないという趣旨のコメントを、挿入せざるを得なくなることまでその構想の中に入っていたのかどうか。この点について考察する前に、まずこのコメントが、どういうものか、考察しよう。

ワットがノット氏の家に滞在し始めた頃、ゴールと名乗る親子のピアノの調律師が、ノット氏の家にやって来る。父親は盲目で、息子に腕をとってもらっている。彼らは、ワットの案内で音楽室へ行き、話をしながらピアノを調律する。この、一見何でもない出来事（情景）を、ワットが頭の中で繰り返しているうちに、その情景の意味が最後には、すべて失われ「2人の人間がピアノを調律しにやって来て、調律をすまして、よくあるように2、3言葉を交し、そして帰って行った」という「最低限の意味」(p. 74) さえ失われ、その情景は、光や動きや音など、一連の単なる物理的現象と化す。そのため、ワットは、この件について、何が起ったのか分からなくなり、しかじかのことが起ったと、確信を持って言うことができなくなる。そこでワットは、逆に、この一連の物理的現象から、何らかの意味を引き出そうと必死になる。語り手が明確に語れなくなったのは、次のように、その時のワットの「感情の状態」des modes de sentiment であり、明確に語れない理由を、同時に明かしている。

「しかし、意味に対してこのように無関心なのに、意味をこのように探求するとは、如何なることであったのか？ そして、それは何のためであったのか？ これらは微妙な問題である。というのは、ワットが遂にこの時期

のことを語ったのは、ずっと後のことであって、彼が保っていた記憶は、或る意味では、多分彼が望んでいた程明晰ではなかったからである、丈も別の意味では、自分の思い通り明晰だったけれども。それに加えて、或る時期、或る場所、そして恐らく或る健康状態に固有な感情の状態を、その時期が過ぎ、その場所を去り、そして肉体が全く新しい状況と格闘している時になって、意のままに思い出すことは、周知の通り困難である。それに加えて、ワットの伝達の曖昧さ、彼の喋り方の速さ、そして、彼の統辞法の異常さがあり、後を御覧頂きたい。それに加えて、これらの伝達がなされた物質的条件がある。それに加えて、これらの情報を提供された者が、受け入れる力に乏しいということ。それに加えて、これらの情報を委ねられた者が、さらにそれらを伝える力が乏しいこと。そこで、今、喚起されたような問題だけでなく、ワットがノット氏の家へ到着した瞬間から出発するまでの、ワットの体験全体を明確に言い表わすことの難しさについて、少しは解って頂けるであろう。》(pp. 75-76) (傍点は筆者)

ゴール親子の情景が意味を失ったのは、アルセーヌの体験と同様、外界の日常的な捉え方——余り深く物事を考えない普通の人間なら、或いは、もっと他の健康状態にある時ならワットもしていたであろう捉え方——ができなくなったからであり、語り手の言う、ワットの《感情の状態》とは、そうした状態から、まだ完全には回復していない時のものである。従って、それが、大変微妙なものであり、明確に言い表わし難いものであることが理解されよう。語り手が、自分がワットの代弁者でしかないことを告白し——或いは、代弁者でしかないということにして——、全知たる立場を放棄したのも、已むを得ないことと思われる。

が、だからと言って、物語の途中で、全知たる立場を放棄せざるを得なくなったのが、語り手にとって全く予期せぬことであったのかどうかと言うと、必ずしもそうではないように思われる。語り手が全知でない理由が、余りにも理路整然と分析され語られていることから、又、このコメントの中に、物語の

後の展開を考えた節が見られる（後述）ことから、このコメントが、かなり熟考された上でなされていると思われるのである。

さらに、語り手がワットの体験を明確には語り難くなる、ということが、やはりアルセーヌの報告の中で、次のように予言されていることと、奇妙に対応していて、幾分予測されたことのように思われる。

《否、私の知っていることを、すべてあなた（＝ワット）に語ったと言うのではありません、[……] というのは、又、我々（＝召使い）が知っていることは、大部分、言葉で言い表わせないもの (l'inexprimable)、或いは言いようのないもの ([l'] ineffable) と関わっているので、それを表現しようとする、又は、それを口にしようとする試みは、すべて失敗するよう定められている。[……] 私自身、この微妙なものを明確に言い表わそうと必死でした、ハッハッ、[……] そして無駄に終わったのです。》(p. 64)

この予言は、勿論、ワットに対してなされたものであり、実際、この予言通り、ゴール親子の情景やポットについて、《しかじかのことが起った》(p. 74) とか、《これはポットである》(p. 82) というように言えなくなっている。この予言が（ワットの）物語のレベルのことである以上、語りのレベルでの出来事、即ち、語り手がワットの体験をすべてに亘っては明確に語れなくなるということとは、無関係のはずである。しかし、この予言から間もない時期にそれが生じている (p. 75) ことからしても、作者の意識の中では、語りのレベルに於ても予言の通りになることを、秘かに予感し或いは企図さえしていた可能性が無いでは無い。もし、そうでなかったとしても、作者が、小説のあちこちで、わざとらしくフットノート⁽¹⁾を付けたり、補遺を付けるなど、自らの全知・全能たることを嘲笑っていることを考慮すれば、物語の途中で、作者（と言って悪

(1) Ruby Cohn, *Samuel Beckett: The Comic Gamut*, New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1962, p. 90.

ければ、語り手)が、自ら全知であることを放棄することに、余り抵抗は無かったであろうということが、少なくとも言えるであろう。

アルセーヌは、その報告の中で、他にも、ワットに対して、ノット氏の家の召使いの仕組を説明している。即ち、この家には、前任と後任の2人の召使いが常に居て、新たな召使いがやって来ると前任の召使いの方が立ち去るという仕組になっているというのである。又、召使いが常に居るのは、ノット氏が自分で自分の世話ができないからであるという生活上の理由 (p. 60) と、もう1つ、形而上学的な理由、つまり、ノット氏の存在を証明する人間が必要だという理由 (p. 210) からであるというのである。が、それでは、何故ワットがやって来るかの、又、この仕組が誰によって考案されたのかという疑問、これは、読者が当然懐くであろう疑問であるが、それに答えんとでもしているかのよう

に、次のように言っている。

《[……] そして或る男がやって来る。すぐ彼の後の台所の戸を閉める、そしてアースキンが出て行く。そして或る夜になると、もう1人の男がやって来てワットが出て行く、今しがた来たばかりのワットが。というのは、来ることは出て行くことの影の中にあり、出て行くことは来ることの影の中にあるからであり、あいにく、そうなっているのです。》(p. 58)

アルセーヌは、読者の疑問に答えることを、ユーモアを混えて、巧みにかわしているのである。このように、ワットが召使いの系列の1人であり、機械的な仕組に従ってノット氏の家に行き、いずれ立ち去るということ以上に、何ら理由を(作者が)示すことが出来ないのは、この仕組が作者による創案に他ならないからである。特異なことが必ず起るノット氏の家といい、この召使いの自動的仕組といい、結局は、意味の崩壊の体験を小説化するためのフィクションなのであると言えよう。

さて、既に引用した語り手のコメントの中には、先程少し触れたように、既に物語のそれ以降の展開が着想されていることを窺わせる部分がある。語り手は、こう述べていた。

《それに加えて、ワットの伝達の曖昧さ、彼の喋り方の速さ、そして、彼の統辞法の異常さがあり、後を御覧頂きたい。》(p. 75)

《後を御覧頂きたい》と、語り手が言っている通り、ここに見られるワットの話し方が、Ⅲの、語り手(‘私’)とワットの対話の場面で、実際描かれている。例えば、ワットは、文の中の単語の順序や、単語の中の綴字の順序や、さらには、文節の中の文の順序を逆さにして話している(pp. 169-175)。それだけではなく、《伝達の行なわれた物質的条件》についても、Ⅲで、語り手とワットが精神病院らしい施設の庭で対面し、語り手がワットの口述を手帳に筆記するという形で描かれている(p. 170)。語り手の、情報を受け入れる力の乏しさについても、Ⅲで、《私の衰えた聴力と理解力を働かせても、ワットの呟きを大部分逃してしまい》云々と述べられている(p. 161)。このように、語り手が、自分が全知ではないことの理由として挙げたことが、同じ小説の後方(Ⅲ)で描写されていることから、作者は、上述のコメントを書いている時点で、既に、Ⅲでの物語の展開の仕方を、かなり具体的に考えていたということが分る。

語り手は、Ⅱでそれ以後も、ノット氏の家での滞在の第1の時期のワットの体験を、やはり物語の外から語り続けているが、今や、語り手が代弁者でしかないことを承知の上で、我々読者は読まねばならないし、語り手自身、そういうことを時折コメントしながら語っている。こうして、Ⅱは、ワットの前任の召使いアースキンが去り、新しい召使いアーサーがやって来て、ワットの仕事の担当場所が1階から2階へ移ることが暗示されたところで終る。

Ⅲに入って、突然、語り手(‘私’)が物語の舞台に登場し、彼がワット本人からその体験を聞いている場面が展開されることに、初めてこの小説を読む者は

驚かされるであろう——というのは、《後を御覧頂きたい》と語り手が言っていることを覚えていたとしても、それが実際どのような形で展開されるかは、恐らく作者にしか分らないからである——が、このことは、既に述べたように、作者の構想の中に入っていたことなのである。

ところで、語り手の言うように、ワットの物語（ノット氏の家でのワットの体験とその前後の旅）がすべてワットから聞いたものだとするれば、批評家たちが指摘しているように、例えば、Ⅰの最初の、ワットが電車から降りる以前の、市民たちの会話の場面を、ワットはどのようにして知り得たのか、読者は疑問を懐かざるを得ないであろう。その他、Ⅳの、ワットが気絶している間に、駅員たちが交した会話の内容や、同じくⅣの最後の、ワットが乗った汽車が出発した後の駅員たちの会話の内容を、ワットは知り得ないはずである。そうすると、少なくともこれらの部分は、語り手が作り上げた架空の話だということになる。ところが、実際には、ワットから聞いたことだと語り手が理っているのは、いずれもノット氏の家に滞在中のワットの体験——Ⅱでは、特にゴール親子の件と、アースキンの部屋の鍵の件——についてであり、ⅠとⅣで語られていることに関しては、そのようなコメントは一切無く、全知の立場から語られている。もし、ワットが語り手に話したことの中に、ノット氏の家での滞在の前後の旅のことが含まれていなかったとしたら、ⅠとⅣのワットの旅の部分が、紛れもなくフィクションだということになる。

こうしたことから、ワットから聞いたことを語っているのだという最初のコメントは、ワットのことを明確に語れなくなったことに対する一種の言い逃れでしかないことが分る。そして、元々、このコメントの真正さを示すはずであ

(1) Hugh Kenner, *A Readers Guide to Samuel Beckett*, New York: The Noonday Press, 1973, p. 78.

Raymond Federman, *Journey to Chaos: Samuel Beckett's Early Fiction*, Los Angeles: University of California Press, 1965, p. 100.

った、Ⅲの、語り手とワットの物語が虚構であるということが理解されよう。実際、Ⅲの冒頭の一節に、以下に見るように奇妙な表現が見られるのは、そのためであろう。

Ⅲは、語り手が、自分が精神病院らしい施設でワットから話を聞いた時期を振り返っているところから始まっている。

《ワットがもう1つの病棟へ移され、私がそれまでの病棟に残されたのは、この頃であった。その結果、私たちが会い、話をすることは、以前よりも稀になった。以前に私たちが会い、話をしたのが頻繁だったというのではない。それどころではない。だが今は、以前よりもっと稀になった。》(p. 155) (傍点は筆者)

この一節は、ワットが別の病棟へ移されるまでは、語り手(‘私’)とワットは同じ病棟に居て、語り手がワットから、ノット氏の家での1階での体験を聞いていた、そして、それを(手帳に筆記したのを)語ったのがⅡなのである、ということ、言外に語っているように思われる。

ところで、《この頃》とは一体いつ頃のことを指しているのか、問題となろう。Ⅱの最後からの続き具合から、これは、ノット氏の家での滞在中の第1の時期の終り頃、即ち、ワットの仕事場が1階から2階へ移ろうとしている時期を指しているとした考えられない。しかし、上述のコメントが本当であれば、それは飽くまでワットがノット氏の家滞在中の時期のことであり、一方、ワットが別の病棟に移されたのは、ノット氏の家を去り、精神病院らしい施設に入れられてからのことであるはずだから、この2つの時期は、別の時期であるはずである。従って、2つの異なる時期が同一視されていることとなり、矛盾してしまう。

もし、以上の2つの時期が同一の時期だとすると、ノット氏の家と精神病院らしい施設が同一のものだということになろう。そうすると、ワットの仕事場

がノット氏の家の1階から2階へ移るということと、ワットが別の病棟へ移されたことが、頂度同じ時期のこととなり、これら2つのことが同一のことのようにも思われるが、ワットはノット氏の家の中で移動しているだけであるから、やはり、同一のことを言っているとは見做せない。それに、それまで語り手サムとワットが同じ病棟に入れられていて、しかもそれがノット氏の家であるとすれば、語り手サムは、ノット氏の家はどこに居たのか、という疑問が生じる。ノット氏の家には、アルセーヌがその報告の中で説明しているように、主人のノット氏と、2人の召使いしか居ない。ワットは、召使いの1人であり、残る1人のアースキンは、やがてノット氏の家を立ち去り、代りのアーサーは、やって来たばかりであるから、語り手はこの2人のどちらでもあり得ないし、ノット氏であるとも思われない。というのは、少なくとも物語の上では、語り手は、ワットがノット氏について行なった観察をワットから聞いて語っている(Ⅱ、Ⅲ)という訳であるから、語り手とノット氏は、一応別人と見做さざるを得ないからである。そういう訳で、病棟とノット氏の家は同一のものとは見做せない。やはり、2つの時期を同一だと考えることはできないのである。

そこで考えられるのは、《この頃》とは、‘ノット氏の家で仕事場が1階から2階へ移る頃のことをワットが話していた頃’を指している、ということである。そうすれば、ワットが病棟に入れられている時期が、ノット氏の家でのワットの滞在の時期が後のことであると元通りに考えても、冒頭の一文は、矛盾のないものとなる。そもそも作者(或いは語り手)は、Ⅱの終りの、ノット氏の家で1階でのワットの滞在に続く時期の体験即ち2階での滞在の時期の体験を、Ⅲで、ワットの会話の中で引続き展開させようと考えていて、そのためには、Ⅱの終りの部分までは、既にワットが病棟で語り手に話したものと見做さねばならないのである。そこで、作者(或いは語り手)は、Ⅱの終りの時期、つまり、ワットの仕事場がノット氏の家で1階から2階へ移る時期と、その後、精神病院らしい施設の病棟でその時期のことをワットが話した時期、即ち、ワットが別の病棟へ入れられる直前の時期を一致させる必要がある、そのため、作者(或いは語り手)は、本当は、‘ノット氏の家で仕事場が1階から2階へ

移る頃のことをワットが話していた頃’と言うべきところを、これら2つの時期を同時に指すつもりで、《この頃》と言ったのであらうと思われる。

こうして、Ⅲでは、ノット氏の家の2階での自分の体験——主としてノット氏に対して行なった観察が中心となっている——を、ワットが語り手に話す場面が展開される。ワットの話した部分は、大半は地の文とは区別され、特に、ワットが統辞法を無視して話した部分は、イタリック体で記されている。しかし、Ⅲの残りの約3分の1、即ち、アーサーの若干猥褻な話——これは、ワットの体験とは直接には関わりはなく、作者が筆のすさびに書いたと思われる——が紹介された後は、語り方が一定していない。例えば、語り手がワットから聞いたことに基づいて語っていると、明らかに判る部分（《時々ノット氏は、ワットをひとり残して部屋から姿を消した〔……〕》p.215, etc.）があるかと思うと、語り手が語っているのか、ワットが話しているのか判断し難い部分（《ノット氏は、家の中を歩き回る時、その場を知らない者のように歩き回った〔……〕》p.211, etc.）もある。要するに、Ⅲのそれまでの安定していた語り方が乱れてしまっている。ノット氏の家でのワットの体験に対する語り手の視点が定まっていないのである。とは言え、Ⅲは、ワットが、ノット氏のことを話した後、自分の両手を語り手の両肩から離して、彼の病棟へとつまずきながら帰って行く場面で終り、この章全体が、精神病院らしい施設での2人の出会いと対話を語ったものとして締括られている。そして、Ⅳで、語り手は、再び物語の外からワットの物語——今やワットはノット氏の家の台所から立ち去ろうとしている——を語り始め、Ⅰと対称的にして、ワットの物語の枠としているのである。

以上、筆者は、ノット氏の家でのワットの体験は、アルセーヌの予言の段階で、又、Ⅲでの物語の展開は、語り手が、自分はワットの代弁者でしかないというコメントがなされた段階で、既に構想されているということを指摘し、次に、語り手がワットの代弁者でしかないというのは、恐らく口実でしかないと

いうことを示し、Ⅲの冒頭の一節に対して1つの解釈を試みた。

アルセーヌが予言した通りにワットが体験した、周囲の世界の日常的意味の崩壊の体験、これを原体験と呼ぶとすれば、この原体験を小説化するため、ノット氏の家という、言わば虚構の空間を設定し、原体験を主人公ワットの体験として、ベケット（と言って悪ければ語り手）は語っている。が、いざ語り始めた時、早くも、語り得ない部分が生じたため、語り得ない理由として、ワットの体験は、ワット本人から聞いたものだという新たな設定（虚構）を、急遽持ち込んだのであろう。そのため、Ⅲのような、語り手がワットの体験談を聞いている場面が導入されることとなったのである。こうして、この小説は複雑な構成になったのである。一言で言えば、第3者の視点から全知の如く語っていて、それが不可能となったために、語り方が崩れ、複雑な構成となったのである。ベケットが、この小説以後の主要な小説では、主人公を第3者の立場から語ることを放棄しているのは、このことと無関係ではないであろう。

〔付記〕

本文中の引用は、すべて、Samuel Beckett, *Watt*, Paris: Les Editions de Minuit, 1969 からである。尚、この版は、英語の初版 *Watt*, Paris: Les Editions Olympia Press, 1953 が、ベケットの協力の下に、Ludvic Janvier 夫妻によって仏訳されたものである。

引用の部分を訳するに当っては、英語版の *Watt*, New York, Grove Press, 1959 を参照し、訳文としては、高橋康也訳『ワット』（白水社、1971年）を部分的に用いさせて頂いた。